

## ●ブログ「古田史学の継承のために」議論の記録8

2017年6月23日(金)

### 「副都説への疑問」(三) 最新の古地理図情報(大下さん)

#### 「副都説への疑問」(三) 最新の古地理図情報

古田史学会報107号の「古代大阪湾の新しい地図」において、新しい上町台地の古地理研究に基づき、「難波(津)は上町台地になかった」を報告しました。今回はその後の上町台地周辺部分の調査がまとめられ、大阪市文化財協会の趙哲済氏より発表されましたので、難波宮副都説に関係する部分を紹介します。発表資料：趙哲済「大阪湾沿岸低地における古地理の変遷、その最新情報」大阪歴史博物館講演、2017年5月14日

<豊崎神社の地は水に洗われていた>

古賀氏は洛中洛外日記1041、1402話において「孝徳天皇の難波長柄豊崎宮は、現在の豊崎神社のあるところ」としていますが、5月14日の趙哲済氏の報告によると次のようになります。

①豊崎神社周辺の出土遺物：弥生時代の古土壌と同時期の遺物を含む河川成層が分布しているが、この地域における出土遺物は古墳時代前期初頭までで、地層の分析から古代(飛鳥時代)には流路が変わり中津川がその地域に流れ込んでいることが分かった。

②古代の海岸線：古代の大阪湾は大きく内陸に入り込んでいて今のJR大阪駅(梅田)のところがまだ海岸線にあった。  
(肥沼さんへ：地図を別途送りますので、PCの修理が終わったら掲載下さい)

当時の豊崎神社のところは海拔0メートル地帯です。上流で大雨が降れば洪水、海上が荒れれば高潮となり絶えず水の恐怖にさらされる場所です。このような所に大王の宮が作られるのでしょうか。また大阪市文化財協会の調査ではこの地域で7世紀の出土品は見つかっていません。

孝徳天皇の宮は上町台地の北、現在の長柄豊崎と呼ばれている所には「なかつ

た」のです。

古賀氏は1990年に出版された、大阪市文化財協会の冊子『葦火』の記事を根拠に自説を展開しています。たしかに大阪市文化財協会は、1990年の時点では「上町台地西側の砂州が北の方へ連続してつながっていた」と日記1402話に記されているように認識していました。しかし会報107号で説明したように2000年代に入ると、大阪市文化財協会の認識は「上町台地の北側には淀川と大和川を合わせた河内湖の水が流れていた」に変わっています。そして今回北側低地の状況がもっとクリアーになったのです。

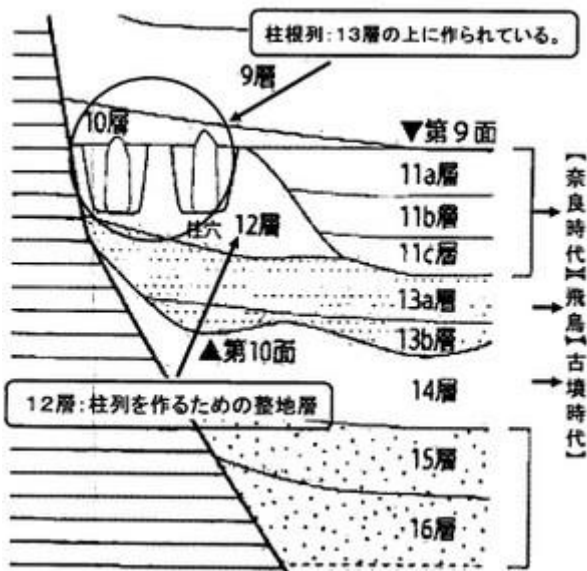
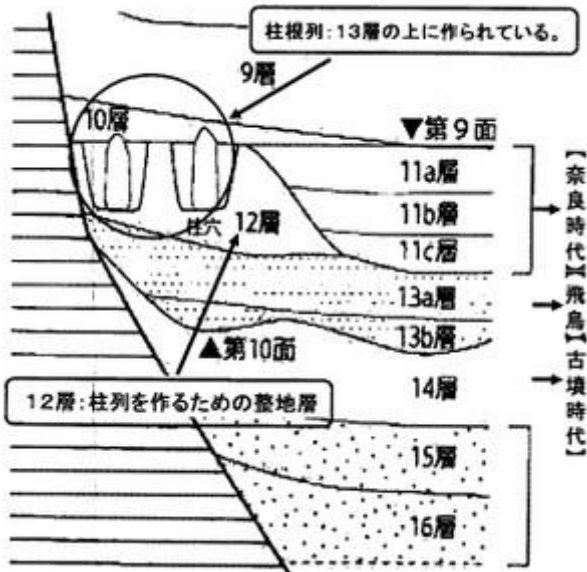
論は事実に基づいて立てるべきです。しかしこれらの事実も「実証より論証」ということで無視されるのでしょうか。

#### ①神崎川古流路



#### ②大阪古地図最新情報

#### ③柱列地層の状況



2017年6月24日(土)

「副都説への疑問」(四) 報告されなかった新春講演会の講演内容(大下さん)

「副都説への疑問」(四) 報告されなかった新春講演会の講演内容

洛中洛外日記1400話、1408話において古賀氏は未だに「難波宮から出土した柱根の“年輪セルロース年代測定値”から、難波宮の孝徳期造営説を妥当とする大阪歴博や大阪府埋蔵文化財センターの説明（論証）が合理的で説得力がある」としています。

この難波宮北辺から出土した柱根の「年輪セルロース測定法と発掘した時の状況」については今年1月22日の古田史学の新年講演会でセルロース年代測定の権威である中塚武氏（総合地球環境学研究所）と発掘を担当した江浦洋氏（大阪府文化財センター）の講演が行われています。

#### <講演会の目的>

古田史学の会ではこの講演会の開催にあたり事前に次のような案内をしています。

---

新聞報道によれば、難波宮から出土した柱を酸素同位体比法で測定したところ、7世紀前半のものとはわかったとのこと。この柱材は2004年の調査で出土したもので、1点はコウヤマキ製で、もう1点は樹種不明。最も外側の年輪はそれぞれ612年、583年と判明しました。伐採年を示す樹皮は残っていませんが、部材の加工状況から、いずれも600年代前半に伐採され、前期難波宮北限の塀に使用されたとみられるとのこと。新春講演会でこの技術と測定結果が詳しく解説していただけます。（洛外日記1322話、2017年1月14日から転載）

---

大阪府文化財センターの江浦氏が講演に招かれたのは、古田史学の会メンバーが事前に江浦氏を訪問した時に受けた江浦氏の説明を「柱根列は七世紀前半に作られたもの」だったと誤解し、これは前期難波宮のための作られたことを意味し、正木氏の天武紀難波記事の34年遡上説を証明するものだ、と考えたためです（古田史学の会2016年7月関西例会での説明）。

#### <講演会での報告>

江浦氏はパワーポイントを使って、柱根列が作られていた地層をわかりやすく説明され、「柱根列の下層（13層）から670年代の土器が出土することからこの柱根列は七世紀末に作られたかも知れないと考えている」と説明されました。柱根列の七世紀前半建造説を否定されたのです。

中塚氏の説明は分かり易く、これらの柱根の伐採年が七世紀前半であったことはよく理解できました。しかし、それは伐採年が明確になっただけです。難波宮北辺の柱列がいつ建造されたかはまったく別の問題です。北辺の柱列は七世紀前半に伐採されましたが、難波宮に使われたのは七世紀末だったのです。

<天武の難波記事34年遡上説の否定>

これら柱根列が七世紀末に作られたものであれば、それは天武8（679）年11月是月の「難波に羅城を築く」記事を支持していることにならないでしょうか。天武紀難波記事は無理に34年前の出来事とするのではなく、普通に天武天皇の時代の記事として読めるものです。

古田史学の会では自分たちが開催した今年の新春講演会の講演内容を一切公表していません。また洛中洛外日記では、新春講演会の江浦氏の報告が“なかった”かのように、従来通り「難波宮北辺の柱根列は前期難波宮のために作られた」との説明が続けられています。これも「実証より論証」ということで、自分たちの「論」に都合の悪い「事実」はなかったとされるのでしょうか。

2017年6月24日（土）古田史学 | 固定リンク

## コメント

肥沼さんへ

私のサイトに、『いかにして「前期難波宮九州王朝副都説」が虚妄であることに気が付いたのか—「自分史」的考察—』という小論を掲載しました。「前期難波宮九州王朝副都説」が誤りであること気が付いたのは2017年4月初めのことであったが、そこに至るまでの二年半ほどの「古田史学」との関わりの中で、「古田史学の会」の現状への疑念が深まっていたことが背景にあったことを「自分史」的に考察した論考。「古代史関係の論考」にpdfファイルであります。できたらこれをダウンロードして、「古田史学の継承のために」の新しいスレッドにして、pdfファイルをダウンロードできるようにしてください。

よろしく申し上げます。

投稿：川瀬健一 | 2017年6月24日（土）17時39分

江浦さんの新春講演会の内容

若干ですが、事実誤認があるので報告します。

私の手元にこの講演会をDVD収録したものがあります。ご指摘の所を十回以上聞いて書き写しました。

次の通りです。

「江浦氏講演より」

(柱が立てられた整地層=12層は、13層の上にあって、その12層の上に11層がある。11層は奈良時代の層、13層は飛鳥時代の層という図を示して、口頭説明されています。)

～(江浦氏の以前の論文で)解釈として、奈良時代後期の可能性が高いと言ったが、今となっては怪しくなった。訂正する。

13層は、飛鳥時代の層で7C後半、7C後半と言っているのは、土器の編年から650年より少し新しい時代で、人によっては675年まで引張る可能性もある。

その上に柱を作るための整地層(12層)がある。

12層は、堆積順・上下関係から、11層奈良時代より古いかほぼ同時、あるいは13層飛鳥時代より新しいか、もしくは同時の可能性がありますが、(以前の論文を書いた)当時は12層と11層の関係を考えて、奈良時代のものとして解釈していたが、今は中塚先生の酸素同位体研究成果で700年と言う年代が出ていないことから、古い方に属すると考えている。

13層の堆積直後に12層を整地して掘立柱建物の柵列を作ったのではないかと考えている。

後期というよりは前期(だ。ただ)前期を7世紀中頃だというと、土器2点、新し目のものが出ていますので、そこまでは行かないと考えている。

ここからがややこしいのですが、昭和33年にコンクリートの杭を打っている。

その周りを見ると飛鳥時代の層から近世の土器が出てくる。

上から打ち込んで飛鳥時代の層から近世の土器が出てくると(簡単に)混入と言うが、7世紀の層の中に8世紀の土器が入るのを混入と峻別できるのか難しい。(後略)

と、650~675年と言うのが江浦氏の正式です。反論があるようでしたらDVDを聞いて下さい。江浦さんは例の日本最古の干支年木簡の発見者でもあります。この時「孝徳期」と発表して、(天武期と主張されている)山尾先生に「大本営発表だ」と叱責されたそうで、この山尾氏や白石氏のような大御所に睨まれるので言えないようです。(ご本人に迷惑がかかるので、これは私の想像としておいて下さい。)要するに、非常に柔らかく孝徳期説を述べられたのですが、聞く方の立場で誤解を招く仰り方をされたのです。この辺りのニュアンスも、予め背景を知ってDVDを聞かれたら判っていただけます。

そのような背景があるので、この新春講演会の講演録を公開していないことをお察しく下さい。残念ながら、現役の方々が、ズバリ言えない世界におられるのを察してください。

投稿：服部静尚 | 2017年6月25日(日)13時47分

服部さんへ

6月25日付の服部さんの投稿文について下記します。

#### 1. 服部さんの事実誤認

服部さんは投稿文の10、11行目で「～（江浦氏の以前の論文で）解釈として、奈良時代後期の可能性が高いと言ったが、今となっては怪しくなった。訂正する」とされています。江浦さんが柱根列の建設時期を「奈良時代後期」とされたことは一度もないと思います。テープではそのような発言が残っているのでしょうか。江浦氏は2006年の発掘報告で「柱根列は後期難波宮関連」のもので考えられるとされています。後期難波宮とは726年に造営に着手、745、746年に聖武が遷都したとされるもので、8世紀前半の建物です。

#### 2. 江浦講演の内容

小生はテープを取っていませんが、講演会の直後の1月23日に、江浦氏の講演の結果について、服部さんも含め「古田史学の会」幹部に下記内容の講演のまとめを郵送しています。

---

「古田史学の会」全国世話人御中  
江浦氏・新春講演会について

今回は江浦氏・中塚氏の講演を企画していただき有難うございました。講演内容を下記します。

江浦氏は講演において、大下が「古田史学の会」9月例会で発表した資料を画面でとりあげ、前に作った江浦報告の内容を、次のように一部だけ修正したいと説明されました。

- 1) 大下レポートにある2006年時点における江浦見解の記述は正しい。
  - 2) 但し、当時の解釈を変えたところがあるので、下記を修正する。
- ① 柱根基部の焼け跡は、現在は基部を保護するために人為的に焼いたものと考えている。
  - ② 柱根列は13層（飛鳥時代）の上に建てたと考えていたが、13層の最後の段階に建てたものと今は考えている。13層に670年代の土器が含まれているので、柱根列はそれ以降に建造されたものと思う。
  - ③ 整地層に含まれる重圏文瓦は少量の破片なので、今はこの柱根列が後期難波宮関連のものとは考えていない。

（コメント）

- A) 以上の見解から、この柱根列は後期難波宮関連のものと考えていたが、今は前期難波宮関連のものと考えようになった。
- B) 前期難波宮の建設時期は750年の孝徳期から770年の天武期までいろいろな意見がある。前期難波宮関連といったものが、独り歩きしているようだ。

C) 土器編年もいろいろな意見があり、また土器破片の混入という問題もある。しかしこれを言い出したら考古学からの見解が出せなくなる。(後略)

要するに、古賀・正木・服部さんが「江浦氏が“難波宮遺構から出土した柱根列が七世紀前半に作られた”」とされたことについて、江浦氏は「自分は前期難波宮関連とはいったが、それが七世紀前半だといっていない。柱根列の建設は飛鳥時代の末、七世紀末と考えている」と、はっきりと否定された講演だったと理解します。(江浦氏は前期難波宮の造営時期について孝徳期か天武期か名言されていません)

-以降略-

---

この小生の古田史学の会幹部への手紙に対して誰からも、何の反応もありませんでした。

当然この時点における服部さんも含めた「古田史学の会」の江浦講演に対する基本的な認識は小生の理解と同じだったと判断しています。

(江浦講演の後半部分)

小生の手元にテープがないので、メモと記憶に頼らざるを得ませんが、江浦さんの後半の説明は服部さんが10回も聞き直しをしなければならないほど、わかりにくい説明だったと思います。

後半に話されたことは土器編年のことで、大阪市文化財センターと大阪府文化財センターの論争の間に挟まれてあのような苦しい説明になったものと理解しています。

### 3. 服部さんの指摘内容

服部さんは江浦氏講演後半の分かりにくい部分だけを捉えて、それも江浦氏の説明を自分の都合のよいように解釈しているだけだと思います。それを自分だけが持っているDVDテープを持ち出して、まるで確実な証拠を握っているかのように説明をしています。事情を知らない人たちが読むと、小生が嘘つきで、このブログにおける小生の発信がすべて嘘かのように信じ込ませかねない内容です。

まさに今テレビを賑わせている前川前事務次官の発言に対して、首相官邸が「前川氏にまともに反論出来ないので、女性問題を持ち出して、世論に前川氏の人格否定をイメージ付けるやり方ー印象操作」と基本的には変わらない手法です。

服部さんはDVDを撮っているなら、江浦講演のすぐ後に小生が送った手紙に対して、その時点ですぐに小生に対して、間違っているところを指摘すべきだったのです。

### 4. 江浦氏講演後の報告

服部さんは江浦氏に考慮(忖度)してこの講演内容を報告しなかったとされています。しかし古賀氏はすでに江浦氏は「柱根列が七世紀前半に作られたと言っている」かのような



発信をしています。古田史学の会は十分に江浦氏に迷惑を掛けているので、お詫びの意味でも講演内容を正確に発表すべきであったと思います。

古賀氏が東京古田会ニュース171号17頁で指摘しているように今回の講演は正木氏の34年遡上説を江浦氏が考古学的に裏付けるもの、と位置付けし行われたものです。

当然講演では「残念ながら正木氏の三十四年遡上説は江浦氏の講演からは確認できなかった」と東京古田会などへも、正しい結果を報告すべきでした。それを今になっても、中塚氏のセルロース年代測定まで持ち出して、「科学が副都説を支持している」と全国に発信しているので、本当のことは何か皆さんにわかって欲しいと思っているものです。セルロース年代測定は伐採年が分かるだけで、建物建設時期を正確に知ることはできません。その木が長く寝かされてのち使用される場合、また転用して使われる場合があるためです。

#### 5. 古田史学の会員の方へ：このブログへの投稿について

このブログの目的は「古田先生の学問の方法に基づいて古代史を勉強して行く」ためとして立ち上げたものです。先生の方法に基づいて前向きに「古代に真実を求める」場です。このブログに古田先生の学問の方法でない投稿があると、收拾がつかなくなります。このため最初に「古田史学とは何か」を掲載しました。

現在の古田史学の会は「実証よりも論証」と古田先生の学問の方法とは真反対の方法をとり、具体的には自説に反対する者を排除する運営がされています。このブログは無意味な論争をするための場ではありません。現在の古田史学の会の手法をこのブログに持ち込まないようにお願いします。

投稿： 大下隆司 | 2017年6月27日(火) 21時13分